勞働者教育への註文

協調會　今井俊介

「人生が戰爭なら教師は詩人だ。無くてはならぬ軍歌を作つて少年を戰爭に熱狂せしめる詩人だ

—ジャン・パウル—

文化力を有する者

獨逸の人口問題研究家リカード・カールヘルが「出産の動向」と題する小論文の中に「人間の性命力の中に文化力と云ふものがあつてそれが諸々の文明を創造する。處が文化力なるものゝ力が衰へ初めると自己が創造した文明が重荷と感じられて來ることは恰も老衰が肉體を重荷と感じさせると同樣で、人口の都市集中、物質文明の重積、煩雜にして且矛盾せる社會制度の固定が勤脈硬化症狀の初期的現象となり、該文明が滅亡し去るものである。バビロン・ギリシヤ、羅馬の都市文明もかくして亡び去つたもので、今日の歐米諸都市も亦衆外早くかくの如き滅亡に瀕するであらう。而して後世怖るべきは素朴單純にして性命力の旺盛なアジア諸民族であらう。」と說いてゐる。

カールヘルの觀る所定に我々も肯定せざるを得ないが、明治以來歐洲文明を吸々取り入れて一應見事に物質文明の華を咲かせた我が日本民族の性命力——文化力が彼等の後塵を踏んで、既成文明の重荷に喘いでゐないと誰が斷言出來ようか。

簡易素朴なる生活に甘んじ、明日の文明を創造する强烈なる力を有する者は今日文明の先端に踊る者では斷じてなく、地下百尺に埋れてカーライルの所謂無言に思想し、無言に經營する偉大沈默の英雄である。私はそれを唯物的意味にあらざる持たざる者の階級に發見する。農民と勞働者は此の意味から云つて既成文明から蝕まれること最も少く新鮮澄淸な文化力を潛藏してゐるべき階級である。彼等には既成文明人の如き惱みもなければ迷ひもない。細徑に迷ふ哀れむべき小羊ではなく、眠れる獅子たるべき存在である。默々不言の裏に思想し、行動する沈默の雄者でなければならぬ。かくの如き者多くありてこそ明日の日本に悠久の進歩と發達が約束されるのである。

然るに現實に於いては如何。

勞働者の沒落

農民は此處に論じることを暫く止めて工業勞働者に就いて觀ると第一に感じることは一般的に彼等も既成文明人と等しく文化中毒に冒され、畫だ宋朴的感覺のみが發達して、太く逞しい精神的骨力が缺けてゐる。從つてカフエーや映畫に享樂はするけれ共、大義に殉する瑞々しい感激的精神が見受けられない。西洋的な概念の學問を口眞似に論ずる者は適にあつても、自ら深く修め、默々人格の向上を企願し人一人感化指導しようと努める者は少ない。大衆徒黨を結んでは勇敢に事業主に挑戰はするけれ共、一人起つて誠心誠意事業主を動かさうとする佐倉宗吾が見當らない。

第二に彼等は多く部分人と成り果て、知情意の渾然たる人格が確立されて居ない。これは產業革命の生んだ分業制度が彼等をしてかくの如き機械的人間たらしめたのであらうが、私は偏狹と情意の罔渦と人間味の缺乏を彼等の中に多く發見する。かくては眞に人格の投影としての完全な生產が出來よう筈がない。

加之、生活の不安定や長時間の勞働や不健康は彼等をして益々利己的、唯物的、享樂的傾向に奔らせて止まない。此處に於てか、彼等も亦現代文明の重荷に喘ぐ瀕死的分子となり、現代支配階級と共に唾み合ひつゝ沒落的運命を辿つてゐる。

勞働教育を如何にすべきか

官公私に於ける勞働者教育の搖籃當者として日本文明と日本產業の悠久なる發達を願ふ者よろしく此處に思を潛め、次の文明の創造者として大なる役割を果すべき之等の人々を指導し、教育しなければならない。共處に先づ第一に、教育者は西洋的概念教育學の餘弊を一掃しなければならぬ。時局と共に日本精神の叫びは高いけれ共、その內容たるや尙多く分析的な西洋流眼鏡を以て爲されてゐる。勞働者に日本精神や、日本歷史に關する知識のみを如何程豐富に教へ込んでも、人としての道を踏み行く者には斷じてなれない。此處に最も難しい點が存する。問題は片々たる知識問題に非ずして人の隨順すべき道に則し、素朴簡易な生活に甘んじ、烈々たる創造力を有つ精神に存する。而して之を長養せしめる方法は、東洋に於ける先哲の學、遺文や語錄に賴るより外にないと信じる。

職場教育の眞髓

次に勞働者が教育を受けるのは晉に徒弟時代や見習時代や或は學校時代のみにあるのではなく、寧ろ一生涯を教育時代と考へねばならぬ。眞に道を求める者にとりては事々物々、自己を向上せしめ、自己を教育練磨せしめぬものはない。職場即教室であり、道場である。しかし別けても大切なことは職場の技術的指導者、生產管理者が勞働者に與へる影響の大きいことである。勞働者は生產場裡に技術を習得し、生產に從事するに止らず、此處に彼の一日中の大部分の時間が費され、彼の人生が實現され、生產品を通じてその人格の複寫が行はれる。しかるに今日の現狀に於ては指導者が假令大學出の優秀な技術者であつても、彼等の多くは單なる能率屋であつたり、技術そのもの、傳達者であるに過ぎぬ。技術が人格に吸收され、人格より人格への指導が行はれぬ限り、生產そのものさへ完全ではない。かくては生產場外に於いて專門の教育者が如何程努力して見ても効果は畢竟期すべくもない。勞働者が次第に機械的な偏頗な人間となりゆくことも當然とせねばならぬ。故に生產場裡の指導者たる者も從來の技術屋氣質より蟬脫し、自然と人生に對する高雅な哲學と豐かな人間愛と烈々たる國士的氣魄を抱く詩人的教育者でなければならぬ。

戰時戰後の勞働政策

本書は大會が支那事變に鑑み事態に即應して勞働力の需給調整、傷病軍人保護對策、職後の勞働政策を確立せんが爲、廣く社會各層の權威を招聘し問題を研究し、職時勞働對策懇談會の記錄を集輯せしめるものである。實費五拾錢

昭和十二年度社會運動概觀

（號月三）

社會政策時報

定價七拾錢　送料三錢

社會政策……安積得也
勞働運動……宮本鑑
無產政黨……今井俊介
產業組合……山本鑑
勞働組合……中川賢一
國家主義運動……坂井隆治

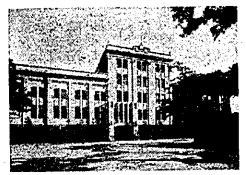
農村社會運動……
勞働者教育……
米國救貧制度……
加發國に於ける農產物價格統制

發行所　東京芝公園四〇七二番　協調會　振替東京五二四〇番

社會政策學院　學生募集

（第四十回講習）

事變下の社會政策



會場　東京市芝公園協調會館內本學院教室

講習期間　自昭和十三年四月十一日（月）至同年七月九日（土）（日曜祭日休講）

講習時間　自午後六時至九時

講習申込　昭和十三年四月八日限り

受講資格　年齡二十歲以上にして中學校、實業學校高等女學校卒業の者又は之と同等以上の學力ありと認むべき者にして詮衡の上入學許否を決定講習開始前之を通知す

講習料　金拾五圓也（講習開始式當日迄納入のこと）

科目及講師

正科講座

現代社會思想　東京帝國大學教授　文學博士　河合榮治郎氏
日本國民思想の特質　東京帝國大學教授　經濟學博士　田中寬一氏
最近に於ける經濟の動向　東京帝國大學教授　經濟學博士　土方成美氏
最近に於ける政治の動向　東京帝國大學教授　法學博士　蠟山政道氏
社會政策及勞働問題　東京商科大學教授　經濟學博士　井藤半彌氏
勞働立法　前東京商科大學教授　法學博士　孫田秀春氏
海外社會運動の動向　國際勞働局東京支局長　鮎澤巖氏
我國社會運動　協調會參事　中川賢一氏
勞働組合、無產政黨運動　協調會囑託　坂井隆治氏
國家主義運動　同　山本巖氏
農民運動　協調會參事　村山重忠氏
協同組合運動　厚生省事務官　鈴木宗正氏
勞働者保護政策　協調會常務理事　產業福利部長　蒲生俊文氏
事變下の產業福利　厚生省技師　武田晴爾氏
事變下の勞務管理　協調會參事　長谷孝之氏
徒弟制度と熟練工養成　社會政策學院主事　大內經雄氏
事變下の勞働衞生問題　日本勞働科學研究所長　醫學博士　陣崎義等氏
勞働者榮養問題　榮養研究所長　醫學博士　佐伯矩氏
社會保險と保健施設　厚生省技師　醫學博士　古瀨安俊氏
國民體力向上策　厚生省體育官　醫學博士　野津謙氏
工場關係傷痍軍人保護問題　厚生省傷兵保護課長　堀田健男氏
戰時勞働統制　企畫院調査官　美濃口時次郎氏
時局と社會事業　中央社會事業協會常務理事　原泰一氏
社會政策の動向　協調會常務理事　調査部長　長岡保太郎氏
產業平和　協調會常務理事　總務部長　町田辰次郎氏

特別講座

社會思想批判　慶應義塾大學總長　經濟學博士　小泉信三氏
我國人口問題　東京商科大學教授　法學博士　上田貞次郎氏
事變下及事變後の經濟　高橋經濟研究所長　高橋龜吉氏
農村と工業との關係　貴族院議員　農村工業協會理事　吉田茂氏
國家總動員法（案）に就て
其の他重要時局問題に就て　會期中

實地講座　數回（土曜日　午後）

工場其他に於て產業並勞働事情實地を見學講習を爲す

研究・懇談會

事變下の重要問題に關し研究懇談する會を隨時開催